



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：卯辰山・ホワイトハウス

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 63-1151

会長：山田 安隆 幹事：大村 精二

会報委員長：清水 忠

1975・1月23日

第32号

“城 下”

作 家 西 敏 明氏



悲しい物語である。

安政5年7月11日観音院の四万六千日の祭礼の灯が消えはじめた頃職人や町人や医者など2千人の老若男女が、松明を片手に卯辰山康申塚に集り、川向うの城に向けて声を限りに絶叫した。

“ひだるいワーイ。米が高うてくえんワーイ”

凶作と物価高に悩む庶民の前田藩に対するはげしい訴えであった。

この安政飢民の泣訴は、とかく暴力に頼った一揆の多かった中で実行使を伴わない純朴なシュプレヒコールとして、徳川藩政史上稀有の事件であった。

今日われわれは、古都金沢のイメージとして、百万石の城下町と

か兼六園とか謡曲茶道など、とりすました優雅な世界だけを描きがちである。

しかし浅野川を渡った卯辰山すそには、この安政飢民の史実のように、庶民のてらいの無い、血の通った苦難に満ちた生活があったことを、私たちは忘れてはいけない。

明治を遡ること僅か10年であった。

—金沢北RC例会卓話より—

(文責 清水 忠)



史蹟 七稻地藏

## 私の職業奉仕

平尾 信明

職業奉仕という大変むづかしい問題を考えたが一向に結論めいたものが出て来ないが、私なりに二、三考えを述べさせていただきたいと思います。

私は自分の食料品製造の仕事を通じて世の人々に如何に喜んで日々の楽しい食生活をしていただけるか、ということではないかと思っております。聖人君子でない限り人は利己的な自分本位のもの、考え方をしがちであり、それが人間性というものでないかと思っておりますが、他人に誠意を尽くす他人に喜んでもらう、他人のためになることを考えるということが奉仕であり、その奉仕を通じて始めて自分というものがあるのだと言うのが私の人生観でもあり職業奉仕でもあります。

近年日本経済の高度成長は目を見はるものがあり、一昨年のオイルショックに端を発し、エネルギー、資源、自然、環境、公害等々世界中が今までにない大きな問題をかゝえ、個々の立場でこれに立ち向かわねばならないのが現状であり、私は自己の企業を通じてこれら諸問題の解決に当り、企業を防衛し、従業員の生活、福祉の向上に努力するのも立派な職業奉仕であると思っております。

また高度成長による日本列島は太平洋岸より発達し、そのために人口は異常なまでに集中し、工場が群立し、自然環境が破壊され、人心がむしばまれ人間らしい生活が困難となりつゝ、ありますが幸にも北陸はまだ自然環境に恵まれ、観光資源も多く、食生活も豊かで、地域開発も節度ある速度で推し進められております。この豊かな北陸を何時までも住み良い地域として保存するのも企業責任の一つであり個々の企業の永遠の発展にもつながるものと思ひ、これが実現のために地域社会への企業を通じての奉仕も職業奉仕の重要な問題と考えております。

更にオイルショック後の日本経済を考えると、トイレットペーパーの買いだめに始まり、売り惜しみ、便乗値上げ等個人、企業を問わず世間の指だんを受け、企業責任を問われておりますが、この根本的な原因は教育（社会教育も含めて）にあり、教育不在が自己利潤の追及や人間関係の欠如対話の不足による社会の種々のヒズミとなって現われております。人は必ず三度の食事をいただきますが最近では食生活の多様化により飲食の機会がめ



レストラン 十字

つきり多くなっております。この多様化した食を通じての生活環境こそ人間社会の場であり、広い意味での教育の場でないかと思われます。私は海産物や佃煮加工、漬物製造を通じて豊かな食生活を楽しんでいただくことも私の職業奉仕であると誇を持っております。

最後に私はロータリー会員としての1年6ヶ月を経て最近では毎日ロータリアンの四つの信条を必ず読み企業の責任を全うしたいと念願しておりますので、会員諸兄のご指導を切にお願い申し上げます。

### ——クラブ奉仕とは——

クラブの会合に出席して親睦を深めること。

クラブの諸計画には積極的に参加すること。

クラブの役員や委員となって協力すること。

クラブの経費を負担し、奉仕につとめること。

## “雑誌週間”にあたって

情報委員会

RIの年中行事の一つに“雑誌週間”がある。毎年の1月の最終週間に実施するよう要請されている。之はロータリーの機関誌に対する会員の認識を深め、それに依て購読部数の増加を計ることを目的としている。今年は1月19日(日)から25日(土)がこの週間となるが、当クラブでは30日の例会でこの行事を実施する予定である。

RIのいう公式機関誌とは、RI発行の英語による“THE ROTARIAN”及びスペイン語の“REVISTA ROTARIA”を指すのであるが、日本には歴とした“ロータリーの友”のあることはご存知の通りで、世界には此の他に20数種のいわゆる地域機関誌が発行されている。

公式、地域を含めて主なるものの発行部数のベストテンは次の通りである。

1. THE ROTARIAN 発行=アメリカ(英語) 454,200部
2. ロータリーの友 発行=日本(日本語) 70,200部
3. ROTARY 発行=イギリス(英語) 53,100部
4. REVISTA ROTARIA 発行=アメリカ(スペイン語) 41,300部
5. ROTARY NORDEN 発行=ノルウェー(ノルウェー語等) 40,000部
6. LE ROTARIEN FRANCAIS 発行=フランス(フランス語) 26,000部
7. ROTARY DOWN UNDER 発行=オーストラリア(英語) 21,000部
8. DER ROTARIER 発行=西ドイツ(ドイツ語) 15,000部
9. BRASIL ROTARIO 発行=ブラジル(ポルトガル語) 13,500部
10. ROTARY 発行=イタリア(イタリア語) 12,000部

この中No.1のTHE ROTARIANは日本では約9千部購読されているが、之を読みこなしている日本人は果して何程あろうか。日本における活用価値は極めて低いようであるが、クラブ細則第10条において“ザ ロータリアン”の購読を定めているクラブはその義務がある。

一方“ロータリーの友”は、RIの公式機関誌ではないが、日本ロータリーの完全なる公式機関誌であり、内容の充実している点では世界一の定評があり、RIもそれを認めているという。“ロータリーの友”は昭和28年1月創刊、当初は3300部の発行であったが、近年イギリスの機関誌を追い抜いて遂に第2位となった。現在の委員長は安野P.G.、その前は神守P.G.であった。又各地区から1名宛委員が出て編集に参画している。

現在の当地区委員は岐阜県の各務氏、その前は三重県の平野氏、その前が石川県で当クラブの柴田会員が2ヶ年勤めた。

1ヶ月の購読料収入は67,500部×@200円=13,500千円、広告料収入は2,600千円、諸経費を差引いて1冊の原価は165円と、1月号から200円に値上げされたのも無理からぬ所であろう。原稿料の支払いが殆どなく、職員が少ないこと、利益を考えないため、あの内容と体裁では200円は日本一安いのではないか。

われわれの機関誌として“友”に親しみ、精々熟読され、ロータリーを身につけてほしいものである。投稿は自由、5日までに到着した原稿は翌々月号に掲載の建前となっている。

